

## 松本ちるこ

（平成二十七年一月号）

芒白くちぎれるほどに靡けるを秋田の秋の景色とながむ

奇しきものと見てある秋の旅の窓山の朝あけたちまちに消ゆ

山法師錦木洋種山ごぼう声もたぬものはやも色づく

海を見にといへば羽越に乗り合へる地の人のたまふ「いい空なた」

写生する人去りてしまへば男鹿を指す鷗とわれと海波の音

草枕旅の夕べの「じん市」のザクロビールの深紅をかかぐ



### ●作者の言葉

海なし県に住む私は常に海をもとめているようだ。秋田歌会の講演の後、一人秋の日本海へ直行した。男鹿半島を

遠望する浜辺、その十月の海は深く蒼く穏やかさを湛えていた。行きずりの地の人と交わした言葉の何とも言えない優しさに心篤くし、夏の竿灯

祭りにも思いを馳せる旅となった。

思えば私に短歌の初めをお与え下さった伊藤嘉夫先生から「日々よい生活であれ」のお言葉をいただいてから何十年過ぎたろうか。

・九十九里浜の波の遠鳴り日のひかり青葉の村を一人来にけり 伊藤左千夫

### ●選者の言葉

見たいと思っていた場所に行き、いきいきと元気な眼で見た風物をデッサンした一篇。昨秋の秋田歌会の前後を一枚の絵とするために、松本さんは早めに出発して小さな一人旅をした。辺鄙な海ぎわを走る羽越線にも乗ったようだ。取材意識の旺盛さ、好奇心の強さなど、今時珍しい初々しさを持つ一人として注目している。今年は巡り合せで三度特選欄に登場していた。連作の形をとることのまれな作者の、これは一気に詠みあげた気迫のようなものが魅力。

・崇むる界へ踏み越ゆる時畏れけらざるやたとへば月に立つたる土足 15年2月号  
・やはらかき発光体とみてをりぬ生れて三日のをみなごの淡紅 14年12月号